

秋田近代史研究

49

2010・8

秋田近代史研究四九号



論 文

秋田県下の第1回貴族院多額納税者議員選挙……………伊 藤 寛 崇…… 1

近代史随想

増田水電の軌跡と地域エネルギーの未来……………脇 野 博…… 32

二〇一〇・八

秋田近代史研究会



秋田近代史研究会

増田水電の軌跡と地域エネルギーの未来

脇野博

はじめに

現在の日本では、北海道では北海道電力が、東北地方では東北電力がというように、複数の都道府県からなる広域の電力を1社の巨大企業が供給しており、私達にとっては、電力は巨大な電力会社が独占的に供給するものであるということが常識である。しかし、第2次世界大戦前は一つの都道府県のなかに、数市町村からなる地域に電力を供給することを目的とした中小の電力会社がいくつも存在しており、戦前の電力供給は現在とは大きく異なる様相を呈していたのである。それゆえ、戦前の電力供給の姿は、電力供給は巨大電力会社による広域サービスとしてしか成り立たないという私達の常識＝固定観念を相対化することになろう。そして、この常識＝固定観念の相対化は、地域と電力供給の関係を再考するよい機会になるであろう。

そこで、明治の末から現在の横手市域を中心に展開した増田水力電気株式会社（増田水電）について、その足跡をたどってみたい。

1. 電気の歴史

まず、電気の歴史の概要を次に示しておく。なお、●は秋田県関係の事項である。

- 1799年 イタリアのヴォルタが電池を発明
- 1831年 ファラデーが電磁誘導を発見。クック、ホイートストンが電信機を発明
- 1834年 ダベンポートが電動機を発明
- 1868年 明治維新

- 1870年 グラムが実用的な発電機を開発
- 1871年 東京－横浜間で電信が始まる
- 1876年 ベルが磁石式の電話機を発明
- 1878年 虎ノ門の工部大学校で、初めて電灯（アーク灯）が点灯
- 1879年 エジソンが白熱電灯を実用化
- 1881年 エジソンが世界初の電灯事業をニューヨークで開始
- 1882年 東京・銀座にアーク灯が灯され、市民が初めて電灯を見る
世界初の水力発電がニューヨークで始まる
- 1885年 日本初の白熱電灯が東京銀行集会所開業式で点灯される
- 1886年 初めての電気事業者として東京電灯会社（現・東京電力の前身）が開業
- 1887年 名古屋電灯、神戸電灯、京都電灯、大阪電灯が相次いで設立
日本初の火力発電所が誕生（出力25kW）
- 1890年 東京電灯が浅草紫雲閣でエレベーターを運転（初の動力用電力を供給）
- 1891年 電気営業取締規則が制定される
- 1892年 日本初の営業用水力発電所、京都市営蹴上発電所完成（160kW）
- 1896年 電気事業取締規則制定、電気事業者の監督行政が全国統一化
この頃の電気事業者は火力発電23カ所、水力発電7カ所、水・火力併用3カ所、電灯数12万余
- 1897年（明治30） 近江谷栄次が土崎港町將軍野に汽力発電所を設立

- 1901年（明治34） 土崎港町の近江谷電灯会社の将軍野発電所が開業、秋田市・土崎港町にて初めて点灯*
- 1904年 鉄道の電化が始まる
- 1906年 全国の電灯照明が50万灯に
- 1907年（明治40） 秋田電気会社設立、供給区域秋田市・土崎港町外2町4ヵ村で点灯戸数1488戸。本荘で点灯
- 1908年（明治41） 能代港で点灯
- 1909年 通信省に電気局開設
- 1910年（明治43） 増田水電により増田町・横手町で点灯
- 1911年 電気事業法公布
- 1912年 東京市内に電灯がほぼ完全普及
- 1914年 第1次世界大戦勃発
- 1917年 工場動力の電化率が50%を突破
- 1920年 電力過剰となり、電力会社の再編が急速に進む
- 1927年 電灯普及率87%

*秋田市に電気をもたらした土崎港町の近江谷栄次は、明治30年に発電事業の認可を受け、将軍野に60kW（キロワット）の汽力（火力）発電所を建設した。明治34年4月に需要者の募集を開始し、11月の試運転を経て、12月1日に正式に点灯を開始した。

なお、日本の電気事業の展開は一般的に次のように考えられている。

創業期 明治19年（1886）～

東京電灯開業（明治19年）に続き、各地に電灯会社が誕生

確立・発展期 明治後半～大正

第一次世界大戦の好景気等により電力需要増大、事業者数・発電設備量急増
 明治40年116社、12万kW（普及率2%）が大正14年には738社、280万kW（普及率87%）に増大

過当競争期 ～昭和初期

ピークの昭和7年には事業者数850社まで増加

第一次世界大戦後の不景気、昭和恐慌下で、激烈な顧客獲得競争を背景に、事業者間の合併・吸収が進展

国家統制期 昭和13年（1938）～

戦時体制強化の中で、電力に対する統制も強化

現行体制 昭和26年（1951）～

全国を9社に分け、各地域において民間企業が発電・送電・配電を行う

2. 増田水電の創設

資料1～4は増田水電創設について書かれた新聞記事である。これらの記事から増田水電創設の経緯を見ておこう。なお、資料や図表はまとめて後掲した。

秋田県南部に位置する増田町（現横手市増田町）の松浦千代松（文久元年（1861）9月24日生、大正10年（1921）4月20日死去）は明治31年（1898）、増田町に羽後葉煙草合資会社を設立したが、同37年の煙草専売法公布により製造販売権が民間から取り上げられたため、葉煙草会社を解散して他事業への転身を図り、同43年増田水力電気を創立した。松浦千代松が電力事業への転身を図った理由は次のようであった。増田町の長坂又兵衛が明治41年（1908）に味噌・醤油製造を機械化するためにボイラー利用による自家発電を計画し、工場内に電灯を設置し、電灯の威力を見せるために軒先にイルミネーションを取り付けた。これを見た松浦は、新しい事業として電力事業に着手することを思い立った。

明治41年（1908）9月11日、電灯会社（電力会社）創設のため増田町の有志が松浦千代松を会長として発起人会を開き、同43年9月17日、資本金7万5000円で増田水力電気株式会社が発足した。増田水電の社屋は増田町に設けられた（図1）。

明治43年（1910）11月、発電所が完成した。成瀬川上流に設けられた水力発電所である真人発電所の発電量は220馬力150kWで、10燭

光3500個を点灯できる能力があった。電力は家庭の電灯だけでなく、工場などへも供給された。なお、真人発電所の跡地には現在も遺構が残っている（図2、図3）。同44年4月30日には、増田水電開業式が増田町で盛大に挙行された。

3. 増田水電の発展

資料5は昭和初年の増田水電の現勢について書かれた新聞記事である。昭和8年(1933)の増田水電の状況は次のようであった。

資本金290万円、株式58,000株、株主902名、電灯需用家数40,239戸、取付灯数92,915灯、供給電力2,470馬力、出電力約5,000kW

発電所

瀧の原発電所2,760kW、真人発電所560kW、粧山発電所340kW、川岱発電所180kW、稲庭発電所50kW、火力発電所1,000kW

増田水電は設立後、順調に事業を拡大し昭和初年には40,000戸を超える家庭や事業所に電力を供給した。この事業拡大は増資と買収合併によって行われた。大正期以降、供給区域拡張による水路並に発電所の増設のための増資は次のようであった。

資本金…大正元年(1912)22万5000円、
同6年35万円、同8年75万円、
同15年290万円

買収合併では次のように県南の群小電気会社が増田水電に統合され、同社は地方独占事業になった(表1、図4)。

大正12年(1923)：秋南水力電気会社、
同13年：羽後電力、同14年：河原田水力、
同15年：稲庭水力電気、昭和2年：
皆瀬水力電気会社

また、大正期以降の県外電力会社も含めた電力各社による買収合併によって、県内電力会社の再編が進み、秋田県内では公営を除き、増田水電が唯一の県内資本電力会社に

なった(図5)。

4. 増田水電と公営電気事業

昭和8年(1933)、横手町の公営電気事業をめぐって横手町と増田水電の間で問題が生じた。資料6～7はこの問題を取り上げた新聞記事である。この問題の発端は、横手町が増田水電の一部(横手町への供給分)を買収し、町営電気事業化しようとしたことであった。その目的は町財政の新財源化、電力会社からの寄附や料金値下げを狙ったものなどとりざたされた。そして、横手町による事業化計画は次のようであった。

町営電気事業計画(「秋田魁新報」昭和8年12月11日による)

- ・買収価格200,000円…横手町点灯数17,883灯(10燭光換算)分
- ・歳入…点灯料83,000円、動力料18,000円、雑収入1,200円、計103,000円
- ・歳出…買電費51,000円、経常費22,000円、起債償還15,000円、計88,000円
- ・利益…12,000円
- ・町債起債額…200,000円(25ヶ年償還)

5. 増田水電の終焉

日中戦争以後の戦時体制下で、電力への国家統制が強まり、昭和16年(1941)に「配電統制令」が施行され、全国の配電事業者412社を9社に統合することになった。資料8はこうした電力会社統合のようすを伝えた新聞記事である。

東北では、東北6県に新潟県を加えた7県の各電力会社の一つに統合されることになり、昭和17年(1942)4月に東北配電株式会社が発立され、増田水電も東北配電に統合されて終焉を迎えた。

そして、東北配電は第2次大戦後の昭和26年(1951)に日本発送電株式会社が管轄する東北7県の発電所と統合され、東北電力株式

会社となった。

おわりに

現在のエネルギー供給システムは、化石燃料や原子力などエネルギー密度の高い一つのエネルギー源から広範囲の多数の需要者に供給するという集権（統合）的なシステムである。それゆえ、火力や原子力を基盤にした現在の電力会社は、広域における独占事業体として存立できるのである。そして、社会システムもこの集権的供給システムに即して構築されている。

一方、クリーンエネルギーである太陽光や風力、水力などの自然エネルギーは、エネルギー密度が低いため、一つのエネルギー源からは少数の需用者にしか供給できないため、いわば需用者の数の分だけエネルギー源を設けなければならない、分権（分散）的なシステムにならざるを得ない。それゆえ、クリーンエネルギーを利用するためには、エネルギー供給システムを集権的から分権的システムに変えなければならない、それは現在の社会システムを根本的に変えなければならないというやっかいな問題に直面する。それゆえ、安全性に問題があるとはいえ原発が普及した一因は、原発は供給及び社会システムを変えずに、化石燃料を原子力に置き換えるだけでよかったからである。

クリーンエネルギーは地域ということに即して言えば、まさに日常生活圏レベルの地域に即したエネルギーであり、クリーンエネルギー導入は環境問題の解決だけでなく、地域の再生の原動力になりえるのではないであろうか。なぜなら、クリーンエネルギーは地域を基盤にして利用するとき最も効率よく利用できるからであり、それゆえにクリーンエネルギー導入は地域の再構築抜きにはありえないからである。

増田水電は分権的供給システムであり、増田水電のたどった道筋からは、今後のクリー

ンエネルギー導入と地域の関係を考えるうえでの多くの示唆を得ることができるであろう。そして、夢物語と言われるかもしれないが、増田水電を復活させて横手市が分権的供給システムを構築し、エネルギー的に自立する道もあるのではないであろうか。

資料 1

昭和 9 年（1934） 増電会社の濫觴

（前略）この四半世紀における飛躍的發展は決して一朝一夕の仕事ではなく、人の和、地の利による撓みない努力の招来したものはあるが、其の企業の端緒には「煙草化して電気となる」といふ興味ある挿話がひそんでゐる。

増田町附近は現在と同様、県内における煙草の産地だったが、明治四十三年四月煙草専売実施に伴ひ、増田煙草会社も当然解散の運命となった。政府の買収金が交附され、煙草会社に代る事業の放資方法が考究された結果、既に味噌醬油醸造ようとして自家工場にボイラーを設置し、更に二キロのダイナモによって自家用点灯をやっていた長坂又兵衛氏と先代社長故松浦千代松氏等が、電気事業の有利に着目したのが増電会社の濫觴である。

最初増田、横手両町の点灯を目標に拾万円の株式を募集したが、「西洋ランプ」に対する事業的認識は殆んどない時代だったため、忽ち募集難に逢着、当時の代議士近江屋栄次氏の斡旋で、独逸シーメンス会社の外資によって辛うじて工事を完成し、県下事業会社の外資輸入のレコードを創ったわけだ。

創立総会が明治四十三年九月十七日。横手、増田の両町内に千百三十九の電灯が魔法のやうに煌々たる光を放って、両町民を魂消させたのが翌四十四年二月二十日のことで、創立当時の役員は左の如くである。

取締役社長松浦千代松（先代）△取締役長坂又兵衛、石田四郎兵衛、石田豊三郎、長江八兵衛（先代）、東海林重太郎、佐々木虎吉（先代）、△監査役沓澤甚兵衛、川上勝三淑、

北島虎之助（後略）

（「秋田魁新報」昭和9年6月24日）

資料2

明治41年（1908）9月 電灯会社の発起

平鹿郡増田町の有志は、今回電灯会社を創設すべく去十一日発起人会を開き、松浦千代松氏を会長とし、認可を得たき旨の請願書を差し出せり。会社は十万円の株式にして、動力は成瀬川の上流を利用すべく、電力供給地は増田・十文字・横手・湯沢・浅舞の五町村なりといふ。

（「羽後新報」明治41年10月1日）

資料3

明治43年（1910）10月 増田の水電事業

平鹿郡の横手と増田の両町に電灯を点し電力を供給する目的で、増田町字真人に経営された水力電気事業は、昨今既に九分通り竣工して、来月三日の天長節には点灯の運びに至るそうである。秋晴一日記者は車を駆って此水電事業を視察した。

十文字駅を降り増田町に入って更に二十町を東南の山中に入れば、成瀬川に沿ふ郡道に当り、雄勝と平鹿との境界に近き辺に西洋造りの小建築がある。之が発電所である。視察の当日は幸ひに重役の長坂又兵衛氏が来合せて説明され、東海林取締役の令息も態に同道して諸般の便宜を与へられた。

創立の計画をしたのは三年前である。創立事務所を増田町に置いて、資本金七万五千円で増田水力電気株式会社を組織した。一株は五拾円で千五百株とし、四回払込である株主は約八十名で、主なる株主は東京シーメンシー電気株式会社技師兼支配人村山崎太郎氏が五百株、増田町の松浦千代松氏が百二十株、東海林重太郎氏が百十株、其他長江・佐々木・石豊諸氏が主なるもので、松浦氏を社長に其他五十株以上の七名を取締役に、二十株以上の株主三名を監査役にして居る。前記諸氏は取締役で、川上勝淑・北嶋虎之助・沓澤

甚兵衛の三氏は監査役である。株金は既に二回を払込み、本月二十五日は第三回払込期であると。

発電計画は、元尾去沢鉦山の電気技師和久井栄蔵氏が専ら其の任に当り、独逸から最新式の電力調整器（レギュレーター）一台を取り寄せ、四間に六間の発電装置所に既に据付を終って、今は落水の鉄管を据えると全部の工事が出来上るばかりになって居る。

水源は雄勝郡西成瀬村湯の沢部落で、発電所からは約一里成瀬川を遡らねばならぬ。其処から成瀬川の水を導いて、発電所の後方落差六十八尺の上に溜水所を設けて水を落す。落された水力は二百二十馬力百五十キロの電気を起し、十燭光三千五百箇を点じ得るそうである。尚は水力には充分余力を存して居るから拡張するには差支ないと。

現在電灯の取付を申込まれて居るのは千五百箇程あって、横手には出張所を設け着々工事を進めて居る。出来た上には更に続々申込があるべく、将来三千五百箇では不足になるであらうとのこと。電灯ばかりでなく昼間は電力の供給もするそうであるが、会社は向ふ一ケ年間は三十馬力と見込んで居る。電灯は十燭光一ヶ月六拾銭、供給一馬力四円五拾銭である。電灯は明年度は十燭光二千個と見て、総収入を壹万六千余円の見込であるが、経費七千五百余を差引いて九千円余の益金となり、配当は年九分に当る予算であるそうなる。創立費は器械に貳万円、建家水路工事に貳万円、電線や取付費等に三万五千円を要するとのこと。夕陽真人の山の紅葉に映するを眺めながら帰路についたのは五時に近きころであった。（望）

（「秋田魁新報」明治43年10月19日）

資料4

明治44年（1901）4月 増田水電開業式

既報の如く、増田水力電気株式会社開業式は昨三十日午前十一時、真人山発電所構内増田第二公園にて行はる。式場の入口には緑門

を桶へ、之を入れれば受附の面々厳かに座をなし、記念品の手拭絵端書並に桜花の簪等を渡して式場に案内す。式場は白紋を抜ける黒地の帳幕にて周囲を包み、式壇を飾り万国国旗を点綴し、限り無きの眺望又山水の佳致を極めたり。

偕て定刻となるや社長松浦千代松氏開会を告げ、次に重役にして創立發起人たる長坂又兵衛氏は事業経営の経過を報告し、次て松浦社長の式辞、次に知事の祝辞は加勢警視に依りて代読せられ、次に来賓鎗居平鹿郡長、斎藤横手税務署長、小松横手町長、沓澤秋田銀行横手支店長、林町長の祝辞の朗読並に石垣忠亮国手の大々の演説ありて、〇時四十分全く式の終了を告げたり。

それより式場に於て直に一同の記念撮影を為し、終りて祝宴となれるが、祝宴場は式場の又一層の上段に位せる広場にして、茲には紫、紅、白等の艶廉なる幔幕を囲らし、矢張同じく万国国旗を天に高く吊るし、天然なる老松は其上を蔽ひ、下手の緑りには桜と花との若木をこき交せて、上手なる四阿は老松の枝幹をよく利用して造作し、其眺望の優なる又一層のことにありき。又た前を流る、発電の皆瀬川には、二見ヶ浦髻の夫婦石ありたるが、今日は殊に注連縄を装りて、態々遠く二見ヶ浦に参詣するの煩を省略せるも難有く思はる。又た茶席の配置頗る宜しく、便所の設けさへ凡ならず。

斯くして開宴となるや、重役東海林重太郎氏は小高き処に顕はれて声を大にして閣下並に諸君と呼び、開宴の辞を述べられたり。次に加勢警視は来賓を代表して謝辞を述べられ、横手増田の両町配電区域の芸妓美妓数十名、其卓上に相對して斡旋をなし、近來稀なる盛況にてありき。

余興 宴会場の上手には演舞場を設け、大曲踊り並に芸妓中村屋連の舞踊あり。観覧者七千余人、其人山は破れんばかりにてありき。

慰労の宴 午後三時よりは、増田町新盛楼

に於て遠来の来賓に対して慰労に懇親の宴を張り、時恰も近江谷代議士及スーメンス会社技師長村山崎太郎氏も来り合せ、定刻となるや東海林氏開宴の辞を述べ、加勢氏其他の演説等あり。登山の紅裾全部来り斡旋して興趣大に挙り、八時全く散会せり。尚は他に紹介すべき細大はいずれ次号に詳報すべし。尚ほ株主として遠く出席せるは角間川の荒川新右衛門、北嶋虎之助、横手の小松孫兵衛、富岡久輔の諸氏等にてありき。宴会場の新盛楼々上には百余球の室内イリミネーションを点じ、眼も眩する程にてありき。

来賓 当日重なる来賓には、加勢警視其他祝辞を朗読せる人々の外、金子雄勝郡長、里内鉄道院技師、川上・武藤県議員、吉田(横手)・佐藤(湯沢)・加藤(増田)署長、西村(横手)・竹本(十文字) 駅長、郡会議員、町村長、小玉商業組合長、三浦(東北公論)・芳賀(本社) 主筆等無量三百名にてありき。

イリミネーション 増田電灯会社本社前には、彩色電球をもて大仕掛の変色方法にて会社の社章を顕はし、又横手町の同事務所前にも緑門を造り、門前並に事務室に強度の光力にてイリミネーションを点じ、実に不夜城の偉観にて、横手増田共に其前夜より点燈し、參觀者夜を徹して引きも切らざる有様にてありき。

祝辞

増田水力電気株式会社電気事業茲に成り、本日をもて開業の式を挙げらる。本官亦此の盛典に列するを得たるは洵に光榮とする処なり。

夫れ産業の隆盛は国力発展の要素にして、而かも其原動力は主として電力に俟たざるべからず。方今斯業の発達長足の進歩をなし、各県各郡発電の設備に力を用ふるの時に当り、平鹿郡に於て其欠除を見しは由来遺憾とする所なりき。

此の時に際し、当郡の諸士思を茲に致し相計て本業を企画し、起工二歳本年一月竣工を告ぐ。思ふに其燦爛たる電光は啻に暗夜を照

らすのみにあらずして、実に産業界に一道の光明を与へたるものに外ならず、此地の興隆蓋し期して俟つべきものあらん。洵に県国のために祝賀せざるべからず。茲に聊か蕪辞を述べて祝辞に代ふ。

明治四十四年四月三十日

秋田県知事正五位勲三等 森正隆
〔羽後新報〕明治44年5月1日

資料5

昭和9年(1934) 増田水電の現勢

米代水電、秋田電業、院内電気が大会社に併呑され、県人の資本によって経営される電気事業会社が影をひそめてある際、県南雄平仙三郡十八町四十九ヶ村に盤居して、文化的、事業的動脈となつてゐる増田水力電気株式会社は、創立以来既に四半世紀を経て、北電と共に県下電業界を殆んど二分せんとする偉観を呈してゐる。

同社の概観は八年度下半期公課状によると、資本金貳百九拾万円(払込済貳百四拾六万五千円)、株式五万八千株、株主人員九百二名、電灯需用家数四万二百三十九戸、その取付灯数九万二千九百十五灯。前期末に比し、一千十四灯を増し、供給電力二千四百七十馬力、その他百一キロワットにして、大口電力の供給先は盛岡電灯、吉乃鉾山、雄勝電灯等である。

現在の出電力約五千キロ、増田町の郊外真人山麓に僅か百五十キロのオモチヤ見たいな発電所を設けて創業した当時に較べると、正しく今昔の感ありだ。(中略)

両町の点灯によって俄然附近町村にも供給区域拡張が要望され、水路並に発電所の増設の必要に伴ひ、大正元年には貳拾貳万五千円に資本金を増加、好況時代の波に乗って同六年参拾五万円、同八年七拾五万円に増資し、漸次工業資本的体型を、整へて来た矢先社長松浦千代松氏が同十年四月逝去し、松浦現社長が襲名すると共に、先考の偉業を継いで社長に就任したのを契機として、増電会社は

縦の発展から横の拡張へ移つたのである。

増電の業績と欧州大戦景気に刺戟され、県南地方にも電気会社の簇出を見たが、反動景気時代に入るや、枕を並べて経営難に陥つて来た矢先である。

大正十二年二月資本金五拾万円の秋南水力電気会社を貳拾五万円で買収合併を行ったのを手初めに、翌十三年羽後電力(資本七拾万円)を三拾五万円、翌十四年二月河原田水力を合併、更に翌年一月しかも金融恐慌の直後、万難を排して貳百九拾万円の資本金に増資すると共に、稲庭水力電気を拾万円で買収合併を行ひ、昭和二年皆瀬水力電気会社を百五拾万円で併合したのを最後に、県南地方の群小電気会社は全部増電の傘下に併呑統制され、地方的独占事業の実体を完成したわけである。

その間東北電灯の攻略、増電の配電区域たる雄、平、仙三郡に局部的点灯を行つてゐる盛岡電灯の割込み、横手町の町営電気問題等多難の裏面史が数多く秘められてゐるが、亭々たる大樹にも比すべき今日の覇業は蓋し重役の和協、松浦社長の事業的機略と、八面玲瓏の人格によるものが多からう。

〔秋田魁新報〕昭和9年6月24日

資料6

昭和8年(1933)12月 横手町営電気事業計画

横手町営電気事業は既報の如く基本調査を終了し、八日午後三時から最後の調査委員会を開き、和泉町長から

調査の結果、相当利益ある確信を得たので、電気事業法第二十二条に依り買収に邁進した

旨を諮り、大した質問もなく同町における増電会社の既設工作を買収することに一決し(後略)

〔秋田魁新報〕昭和8年12月10日

資料7

昭和8年(1933)12月 横手町営電気問題

横手町営電気事業は、去る十五日の町会で増田水電会社の一部を買収経営する決議を挙げ、いよいよ実行運動に着手することになったが、公営電気は町村財政の新財源として、又電気料金値下げや政派党略の為にする呼びかけから、各地に公営化の機運がおきてゐる。(中略)十余年前におきた横手町外数カ村の第一次公営電気問題は、投石事件まで惹起し、相当の波紋を起して、横手町には金五万円の寄附、公営策士たちには「金一封」といふことで納まった。横手町に対する寄附金は年額五千元、十ヶ年、昭和七年度をもって契約が解消した。増田水電会社では五万円で「公営権」を買ったと解釈してゐるし、横手町では「金の切れ目が縁の切れ目」とあって、契約終了と共に寄附継続を交渉したが、増電側では表面は兎も角「五万円進呈した外、電灯料まで五銭宛安くしてゐるではないか」といふハラなんである。(後略)

(「秋田魁新報」昭和8年12月23日)

資料8

昭和17年(1942)4月 電力再構成の前進(六) 東北配電

東北配電は設備規模はあまり大きくないが、第一次統合会社の数が多いので設立に種々問題があった。統合会社は奥羽電灯、東北電灯(以上指定会社)青森県、宮城県、仙台市、新潟電力、北越水力電気、中央電気、大日本電力、山形電気、増田水力電気、福島電灯、会津電力(以上出資者)の十三業者である。

東北配電の地域は東北六県に新潟県が加わって居り、統合資産は二億四千三百七十五万八千円、承継負債八千五百五十四万円で、資本金は一億六千四百七十万円、払込一億六千二百二十九万四千七百五十円である。

社長には大日電系から就任するか、設立委員会である新潟電力社長白勢量作氏が就任するか、それによって副社長の顔触れも変ると種々取沙汰されたが、結局白勢氏が引受ける

ことになり、氏が新潟に出掛ける機会が多いというので副社長を二人置き、一人は大日本電力専務橋本万之介氏、一人は元東北振興電力副社長平井出貞三氏が入った。平井出氏としては電力国家管理で電気庁長官になり、それが電力飢饉で長官を止めて東北振興に入ったかと思うと、電力再編成で東北振興が日発に合併して東北振興の職を奪われ、更に配電統合で配電副社長に浮上って来るといふ電気問題の推移と共に複雑な運命を辿っている。理事は宮城県電気局長歌田忠蔵、青森県電気局長斎藤維一郎、仙台市電気水道事業部長桑原政次郎、奥羽電灯取締役金田一光、中央電気専務国友未蔵山形電気常務鈴木清助、大日電取締役田村順三、奥羽電灯社長中岡孫一郎、福島電灯社長西形吉次郎、新潟電力常務畑時雄、同専務山県鼎一の各氏。監事は東北電灯社長小林久治、福島電灯専務鈴木文七、会津電力社長高瀬八郎、増田水力社長松浦千代松、北越水力常務松田弘俊の各氏である。而して統合会社の方は大日本電力を除き他は全部解散する見込である(中略)。

増田水力電気=(資本金二百九十万円、払込済、社長松浦千代松)出資評価四百八十七万余円、債務承継額百五十七万円で近く解散の見込。(後略)

(「中外商業新報」昭和17年4月18日)

*本稿は、2009年6月13日に横手市増田町において開催された美の国カレッジ「あきた学総合コース」において、「流域電力物語～増田水力電気株式会社・上の岱地熱発電所～」と題した講演内容をまとめ直したものである。

図1 初代の増田水電社屋（大正初期）

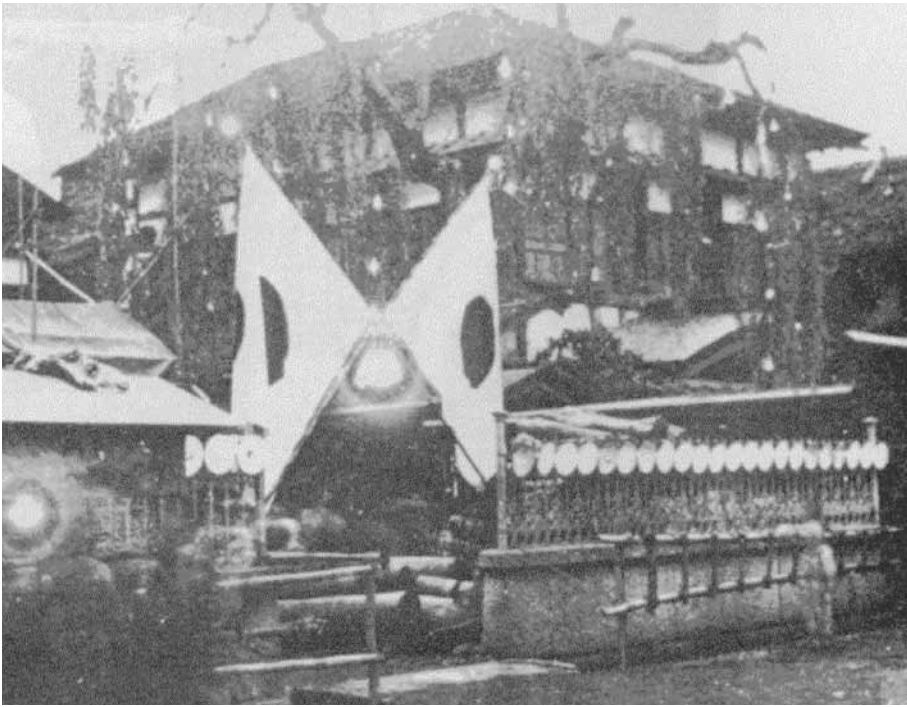


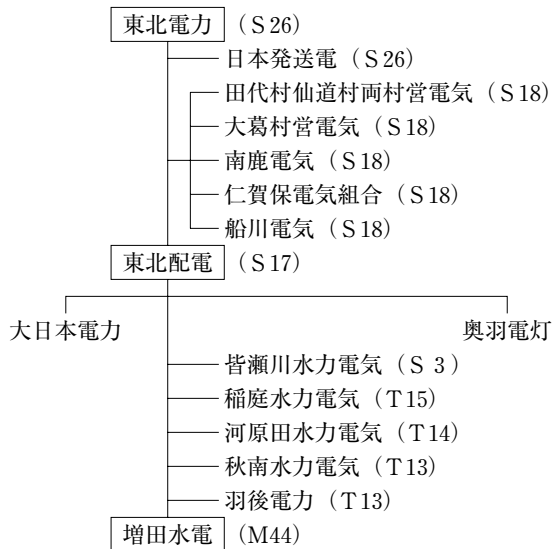
図2 真人発電所（大正初期）



図3 現在の真人発電所跡地



図4 増田水電の変遷・系統図（『増田町史』より）



* 『東北の電気物語』 ・昭和6年以降設立の会社もある
 ・（ ）内は、別（新）会社に吸収（合併）された年

表1 明治・大正期創立電力会社一覧（『増田町史』より）

会 社 名	開業年月日	発 電 力	kw数	供 給 範 囲	需要家数
近江谷発電所	明治34.11.18	汽力	60	秋田市・土崎港町	不明
秋田電気株式会社	明治40.6.29	汽力／水力	60／300	秋田市・土崎港町他2町4か村	1,488
秋田木材株式会社	明治41.8.3	汽力	100	能代港町	846
増田水力電気株式会社	明治44.2.20	水力	130	増田町・横手町	665
河原田水力電気合名会社	明治45.6.1	水力	200	角館町他4町3か村	1,237
大館電気株式会社	大正2.2.2	瓦斯力	60	大館町他1町9か村	1,737
北浦電気株式会社	大正3.12.1	瓦斯力	5	北浦町	180
鹿角電気株式会社	大正4.1.3	瓦斯力	30	花輪町他1町1か村	602
五城目電気株式会社	大正4.10.2	瓦斯力	36	五城目町他9か村	670
小坂電気株式会社	大正4.10.16	受電	15	小坂村	337
矢島水力電気株式会社	大正5.1.1	水力	18	矢島町他2か村	328
船川電気株式会社	大正6.5.4	瓦斯力	47	船川港町他1町2か村	773
稲庭水力電気株式会社	大正6.11.17	水力	27	稲庭町他3か村	336
鷹巣電気株式会社	大正7.9.25	瓦斯力	19	鷹巣町他2か村	759
金浦町他1町2村水電組合	大正7.12.10	水力	30	金浦町他1町2か村	1,533
八森電気株式会社	大正8.9.15	受電	40	八森町他2か村	690
二ツ井電気株式会社	大正8.9.27	受電	15	二ツ井町他2か村	624
院内電気株式会社	大正9.1.1	受電	20	院内町他1町1か村	765
米代川水力電気株式会社	大正9.1.22	瓦斯力	195	大館町他5町7か村	5,931
秋田電業株式会社	大正9.2.8	瓦斯力／受電	23／25	鷹巣町他2町11か村	1,383
北秋電気株式会社	大正10.4.19	水力	340	院内鉱山へ売電	
阿仁川電力株式会社	大正10.11.18	水力	80	阿仁合町他4か村	922
秋田水力電気株式会社	大正11.5.2	水力	1,040	秋田木材、船川電気へ売電	
東北興業株式会社	大正11.7.29	汽力	20	田沢村・生保内村	405
南鹿電気株式会社	大正12.9.22	受電	20	宮川村他1か村	718
大日本鉱業株式会社	大正13.1.30	受電	40	八森村他1か村	1,033
刈和野電気株式会社	大正13.4.23	受電	20	刈和野町	563
羽後電力株式会社	大正14.1.30	受電	100	玉米村他24か村	不明
由利水力電気株式会社	大正14.10.23	水力	2,760	増田水電に売電	

* 『東北の電気物語』

・増田水電の開業は正確には明治43年11月

(2010年6月受理)